環境報告書に対する監事監査意見書

Auditors' Review

農環研では、環境報告書を開示する内容の信頼性を高めるために、農環研の監事による監事監査を経て環境報告書を発行しています。

国立研究開発法人農業環境技術研究所「環境報告書 2015」に対する監事監査意見書

平成 28 年 1 月 20 日

国立研究開発法人農業環境技術研究所
理事長　宮　下　　清　貴　　殿

国立研究開発法人農業環境技術研究所
監事　　水　谷　順　一
監事　　堀　　雅　文

水谷、堀の両名は、国立研究開発法人農業環境技術研究所作成の「環境報告書 2015」について、業務監査の一環として行っている環境監査の結果と併せて監査を行い協議の上、本監事監査意見書を作成しました。以下の通り報告いたします。

1，環境監査の目的

当研究所は、事業そのものが環境に関する研究であります。よって、当研究所の作成する「環境報告書 2015」は、理事長はじめ全職員の業務執行の結果そのものであると認識し、監事監査の対象としました。監査の目的は、同報告書の信頼性を独立した立場から監査し、その結果を報告することです。

2，監査項目と監査方法

（1）環境報告書の自己評価体制とその機能の有効性について

＊　監査報告書作成担当部署以外の評価部署の評価体制とその実態

＊　評価部署における評価項目と評価内容

（2）監査報告書の内容の信頼性について

業務監査の一環として、環境マネジメントシステムの有効性・機能性および法令・規則の遵守状況を、関連会議の出席、重要資料の閲覧、現場調査等の方法で監査を行っています。その業務監査の結果と、その基礎になる関連資料と本環境報告書の内容（環境マネジメント、各種環境パフォーマンス数値等）との整合性について監査しました。

3，環境監査の結果

（1）環境報告書の自己評価体制とその機能の有効性について

環境報告書作成部署とは別の部署である監査室が環境報告書を評価する体制をとり、「環境報告ガイドライン(2012 年度版)」(環境省)に基づき、「環境会計ガイドライン(2005 年度版)」(環境省)を活用し、適確且つ忠実に自己評価していることを認めます。

（2）環境報告書内容の信頼性について

環境マスタープランの 2014 年度取組実績は上水と電気の使用量が大きく削減出来て、二酸化炭素排出量の削減目標に充分達成し、具体的には契約電力 500kw引下げ、次年度 100kw更に引下げる予定。上水使用量の大幅削減は老朽化した埋設配管部の漏水箇所を発見・対処した成果で、次年度に改修予定。産業廃棄物の廃棄量は職場環境の安全と効率面から老朽機器や不要物品・薬品類の処分推進から未達と原因は明確です。これまで大型インフラ諸設備と高額実験機器類の更新や耐震補強は年次計画で適切に実施継続され環境面に大きな成果を齎しています。今後重要視すべき環境課題は古い冷凍機の特定フロン処分です。今後「攻めの農業」に向けた研究業務で適切に効率良く実施される事を期待しています。

研究成果では「カドミウム低吸収イネの実用化の推進」から 2014 年度は「コシヒカリ環１号」ＤＮＡマーカー情報と利用方法を公開して、公設農試等と共同研究で奨励品種育成を 11 県 90 品種まで拡大しています。節水管理と組合せて「玄米中のＣd とヒ素を同時に低減する栽培技術」も開発しました。放射能汚染対策では「農作物、土壌等の放射性物質濃度分析から事故後の濃度変化を解明」し、農林水産省の要請に基づき、農作物から高濃度の放射性Ｃs が検出された要因解析など汚染対策に協力をしてきました。

以上。